パネルディスカッションⅠ

コーディネーター　　廣瀬稔也（ＮＰＯ法人　ひずるしい鎮玉理事）

パネリスト　　　　　吉澤保幸（一般社団法人　場所文化フォーラム名誉理事）

田　恩伊（ちょん・うに）（神戸大学大学院国際文化学

研究推進センター協力研究員）

基調発題に続いて行われたパネルディスカッションⅠでは、次のような質疑が交わされました。

廣瀬　まず、お二人のパネリストから、自己紹介を兼ねながら内山先生の基調発題に関する感想などをお伺いしたいと思います。

吉澤　私は日本銀行に20年ほど勤務し、1998年、当時、倒産した山一證券の問題の処理に当たりました。その後、日銀を巡るスキャンダルの責任をとって、日銀を辞めて、いろいろな仕事や活動に関わりましたが、2003年から「場所文化フォーラム」というものを組織し、以来、地域活性化の活動に関わっています。なぜ地域活性化の活動に関わってきたかといえば、従来型の金融経済は行き詰まってきていると思ったからです。

私は学生時代、東京大学の法学部で政治学を学びましたが、当時の1970年代、政治学とは何かといえば、それは富の権威的配分である、と教えられました。つまり、政（まつりごと）とは、まず国の富を増やすことであり、その富をどう権威的に国民に配分するか、それが政治である、と教えられたわけです。

日銀入行当時、日本経済は確かに成長を続けていましたが、しかし、日銀を辞めて以来、国の富がこれ以上、増えるだろうかということに私は疑問を抱くようになりました。確かに経済成長のおかげで物はあふれました。しかし、それは本当の豊かさだろうか、という疑問をずっと持ち続けてきました。

その後、富や所得の格差が拡大し、日本の政治、経済は大きな曲がり角にあると考えるようになりました。そして、内山先生との出会いなどをとおして、国やグローバルな問題を考えるよりも、地域から考え直していこうと思うようになり、2008年から、毎年、「ローカルサミット」というものを開催し、今年は第９回目のローカルサミットを岡山県の倉敷市で開催しました。

それらの活動をとおして、国家という枠組みは残るにしても、地域と地域のつながりがグローバルに展開することもあることなどを経験し、国家はもはやグローバル資本主義を調整することはできない、地域と市民が新しい地域づくりをすることで新しい時代をつくっていかなければならない、と思っています。

田　私が韓国や日本の共同体運動に関心をもつようになるまでには、いろいろな経緯があるのですが、それを話していると長くなるので、私が韓国の共同体運動に関わるようになった経緯からお話しさせていただきます。

　韓国では1990年代の半ばごろ民主化が行われました。それ以来、韓国社会の近代化が進むとともに共同体運動が盛んになりました。私は、なぜ共同体運動が盛んになってきたのか、共同体運動をする人々は、自分の家庭や職場でない場所で、なぜ新しい生活をつくろうとするのか、という疑問から、自ら共同体運動に参加した時期もありました。

それを社会学的に研究するために、2007年、実は日本に２回目の留学をし、現在は日本の共同体運動とも関わりをもちながら、神戸大学大学院で研究をしています。そうした関わりの中で内山先生や吉澤先生とも親しくなり、いろいろと学ばせていただいています。

　内山先生は基調発題の中で、近代化、特に国家ぐるみの経済発展が社会のいろいろな要素を分断し、解体させた結果、私たちは多くのものを失った、と指摘されました。そのことは日本だけでなく民主化以降の韓国でも同じようなことが起こっています。

韓国のある共同体の神父さんが、「我々はもう少し昔に戻らなければならない」と言われたことがありました。韓国でも、近代化によって失われてしまった伝統的なものがたくさんあるのです。

韓国で起こっている共同体運動は、一面では、近代化によって失われた、人間としてのつながりの「場」を取り戻そうとする動きだといえると思います。私たちは、もう少し経済中心の欲望を抑制する技術を学ばなければならない、と思っています。

廣瀬　ありがとうございました。内山先生の住んでいらっしゃる上野村は、私から見ると、理想的な社会像を具現化されているようで、うらやましい限りですが、一方で、平成の大合併によって、以前、約3300もあった市町村が約1700に半減し、多くの町村は都市の周辺と化して、地域としての自律性も失われたと思います。私の住んでいる浜松市の一部も、こうした地域の一つなのですが、地域としての自律性をどのように回復すべきなのか。その点について、内山先生からコメントをいただければと思います。

内山　「中心」と「周辺」というものは、絶えず、つくられてきたことだと思うのですね。江戸時代でも、城下町とか代官所を中心として、上から「中心」と「周辺」がつくられました。

その「周辺」の地域とは、単なる空間ではなくて、いろいろな関係によってできているのが地域だと思います。それは吉澤さんや田さんの言う「場」と言ってもいいと思いますが、その「場」において、自然と人間の関係、あるいは人間同士の関係、さらには歴史や文化や信仰と人間との関係もあるし、そういうものが詰まっているのが地域だと言っていいと思います。

大都市では、そういう「場」をつくることは非常に難しい。だから、全員参加型の地域づくりをしなくても、そうした「場」をつくることに共感する人々が協力し合っていけばいいのだと思います。

上野村の場合、20パーセント強の人は新規移住者で、そのほかにも首都圏に住んでいながら上野村に出入りして地域づくりに参加している人がいるので、そういう「場」ができているわけです。また、外から来た人と村の人との婚姻も進んでいて、行政もそれを支援するなど行政と住民の壁が低いので、いろいろなNPOもできて、協力態勢ができています。地域としての一体化の回復ということは時間がかかるとは思いますが、その地域特有の関係性を生かした「場」づくりが大事ではないかと思います。

このあと、吉澤氏と田氏から、それぞれ日本と韓国での活動について、プロジェクターを使った画像による事例紹介が行われ、引き続きパネルディスカッションⅡに移りました。

パネルディスカッションⅡ

廣瀬　それでは、ここでフロアからの質問を受けてみたいと思います。

質問者A　ストレートな質問で恐縮ですが、いま日本の人口は減少に向かっているといわれます。その人口減少社会の中で、地域活性化というのは、どういう意味なのでしょうか。活性化の意味合いというものを教えていただきたいと思います。

吉澤　日本の人口は減少しても、自分たちのいる場所を誇りに思って地域づくりに頑張っている人が一人でもいれば、それは活性化といえると私は思います。人の数が問題なのではなく、人と人との関係が多数あることや、その濃密さが大事で、地域の中に閉じない形で関係が多様になっていれば、それが活性化だと思います。

田　地域に観光客がたくさん入ってくるから活性化なのか、それとも強い精神性をもって行動している人がいるから活性化なのか。その地域の人々が、居心地がよくて、住んでいることに喜びを感じていれば、それが活性化なのだと思います。

質問者B　共同体と聞くと、そこにいるメンバーは、皆、同じ価値観をもっているように感じられます。しかし、同じ共同体の中で個性や考え方に違いがあるとき、その違いをどう捉え、調和するのでしょうか。また、共同体と共同体の間に違いがあるとき、それをどう捉えていくのでしょうか。

田　共同体と個というものは矛盾するものではなく、ある同質性の中でも個性はいくらでも出すことができます。たとえば、共同体の中で育った子どもは一般社会の人よりもずっと個性的です。それから、同じ「志」や「思い」を共有していることで、お互いの個性や価値観の違いは容易に乗り越えることができると思います。

吉澤　たとえば、自然とは何かというと、いのちの多様性をもっていて、その多様性が共生している世界です。人間のつくるコミュニティも同じで、個々人を生かす意味でも、共同体同士の間でも、多様性があり、かつ、それが共生する、というプリンシプルを忘れなければ、そこには間違いなく安心・安全な世界が生まれ、ピースフルな状態が生まれます。

いまの社会で問題なのは、だれかを否定し排除するということが横行していることです。しかし、共同体では多様性と共生を常に念頭に置いておくことが必要だと思います。そして、その地域の中で「課題は何か」を常に洗い出し、「志」や「思い」を共有する人々と共に行動することで、個性や価値観の違いによる衝突は起こらないと思います。

内山　個性と言った場合、それは、その人が持っている関係性を意味するのですね。自然との関係を大切にする人は、そういう個性をもっているし、家族との関係においても、家族構成の違いによって人の個性は変わってくる。だから、個性とは初めから固定的に決まっているものではなくて、それぞれの多様な関係性を互いに認め合っていくことが個性の違いを認め合っていくことにつながると思います。

それから、社会が変わっていくときというのは、どういうときか。歴史をよく見ていくと、社会に矛盾があるとき社会が変わると、従来、そういう論法で説明されてきたのですが、必ずしも、そうでもないのですね。社会が矛盾に満ちているのに特に大変動が起きないときもある。

では、何が社会を変えるのか。実は、人々がその社会に飽きてきたときにも社会は変わるのです。いまの人は、かなり飽きてきていると思います。新しい共同体づくりにしても、せっぱつまって、これをつくらないと生きていけないからというよりは、飽きてきたからという一面があると思います。歴史変革の理論というのは、全然、科学的でない。飽きるという人間の衝動によっても実は歴史は動いている（満場　笑い）、と私自身は思っています。

廣瀬　長時間にわたって素晴らしいご意見を多数いただきました。皆さま、どうもありがとうございました。